

# ペスタロッチーの『スイス週報』における教育論

福田 博子

Educational Thoughts of J. H. Pestalozzi's "A Swiss Journal"

FUKUDA, Hiroko

キーワード：貧民救済、質素、勤勉、聡明さ、労作

## 1 はじめに

ペスタロッチーの最もよき理解者であったバーゼルの書記イゼリン (I. Iselin)<sup>1)</sup>は、ペスタロッチーの教育思想を多くの人に理解させる方法として、彼に新聞の発行を勧めた。それが『スイス週報』(Ein Schweizer Blatt)であり、約16ページ、毎週木曜日に発行された。内容は、教育、立法から各種の社会問題に及び、形式は、論説、物語、警句、戯曲、詩等のスタイルをとっている。第1号1782年1月3日より、第53号12月26日まで、約1か年続いた。

貧民を救済するには教育の力によるしかないと考えたペスタロッチーは、ここでも貧民の幸福を願って執筆したのであり、社会政策的な意味を持っていた。

ペスタロッチーはこの『スイス週報』の読者を一般大衆より、高貴な身分の貴族達を対象に考えていた。即ち、支配者階級に貧民の生活を理解させ、自分達の生活を顧みさせ、生活を改善させたかったのであろう。冒頭に、著者と読者との対話があるが、支配者階級に読ませたいなら、読まない人々はどのように判断力を身につけるかについて尋ねられ、見聞や行動によって判断力を身につけることができると答えている。また、民衆の取り扱いによって、民衆は多くの判断力を持つことができる、と述べている。即ち、民衆の取り扱いとは、教育によってであろう。また、飢え渴いた時には、パンや水は特別美味しい。しかし、生活の悩みもなく、いつも贅沢三昧をしている人には、パンや水の美味しさは分からない。「一般民衆はいわば必要から、彼の仕事において、彼の義務において真理を学び、彼の判断力を身につける。しかし、貴族階級は多くは退屈しのぎに真理を研究するのであり、前者とは全く違うのである。」<sup>2)</sup>

ここで、スイス週報の中に収められている作品から四つを取り上げ、その教育論を考察する。四つとは「フランスの奥地の場面」、「田舎の靴屋」、「キュニグンデ」、「教育と政治とについての所見」である。

この頃、ペスタロッチーは「紙を買わなくてもいいように、文字の沢山書かれた古い会計簿や綴じ合わされた帳簿の行間に奇妙な脚本を書いた」<sup>3)</sup>ほど経済的窮地に陥っていたのである。

## 2 「フランスの奥地の場面」

このドラマは、1782年1月24日 第4号として発行された。内容は、アメリカの自由主義経済を謳歌しながら、その自由は貴族だけのものであり、飢えた貧民を人間とも思わず、無慈悲に扱うフランス支配者階級の傲慢さを描写したものである。

ここに登場する国、オランダ、イギリス、アメリカの当時の情勢を概観しよう。貴族達はアメリカには好意的であるが、オランダ、イギリスには敵対的である。場面がフランスなので、まずフランスについてその歴史を見たいと思う。

## フランス

歴史を14世紀まで遡ると、フランスでは国王フィリップ4世が1302年、三部会を召集した。これは国民を三つの身分に分け、第一身分である聖職者、第二身分である貴族、第三身分である平民の代表からなる身分制議会であった。その意味は国民の支持を得て、王権の基盤を強化するためであった。ルイ13世の時代には大貴族によって王権の強化をはかり、ルイ14世も中央集権化を推進した。彼は王権は神から授けられたものであるという王権神授説を唱え、国力を強化させるため重商主義政策を採った。こうしてルイ14世は絶対王政の絶頂期を築いた。18世紀後半に至っても、ブルボン王朝による絶対君主制が支配していた。しかし、このアンシャン・レジームに対する批判も、ヴォルテール(Voltaire 1694-1778)やルソー(J. J. Rousseau 1712-1778)やディドロ(D. Diderot 1713-1784)のような啓蒙思想家達によって高まっていた。

1780年代、フランスでは赤字財政が大問題になっていた。その原因はルイ14世時代の対外戦争の出費、アメリカ独立戦争に対する援助、宮廷の浪費であった。それで当時のルイ16世国王は財政改革を行なおうとした。既に第三身分からは莫大な税を徴収していたので、貴族階級の特権を制限し、財政の緊縮を図ろうとしたが、貴族達の反対に遭い、財務長官は辞任に追い込まれた。ルイ16世は新しい財務長官を任命し、第三身分の支持を取り付け、特権身分に対抗するため、1789年6月14日に三部会を招集する。ここで問題の解決を図ろうとしたが、重税に苦しむ第三身分の不満を抑えることはできず、事態は紛糾した。

1789年7月14日バスティーユ牢獄の襲撃を契機とし、フランス全土が騒乱し、第三身分による国民議会が発足、王政と封建制度は崩壊した。

## オランダ

オランダは16世紀末から18世紀後半まで、世界のヘゲモニーとして統治し続けていた。しかし、17世紀中葉にイギリスとフランスは、オランダの優位を排除し、自国がそれにとって代わろうとした。第一次英蘭戦争(1652-54)、第二次英蘭戦争(1665-67)によって、オランダは失ったものも多かった。また、イギリスが自国産毛織物の仕上げや輸出を自国内で、自国商人によって行うようにしたこと、オランダの重要産業のニシン漁は、漁場がイギリスの近海だったため、その利権もイギリスに奪われていったこと等で、オランダの商業も衰退していった。1763年までにイギリスとフランスの強さは明白になっていった。1795年、フランスのナポレオンの軍隊がオランダに侵入し、この国を占領した。

## イギリス、アメリカ

ここで、アメリカ合衆国が成立する前後の歴史を概観したい。イギリスと深く関わっているので両国を同時に扱う。

アメリカ独立戦争(1775-1783年)は、イギリスとアメリカ東部沿岸のイギリス領13の植民地との戦争である。この戦争によって、植民地13洲は独立し、アメリカ合衆国が成立した。

7年戦争(フレンチ・インド・インディアン戦争 1756-1763)後、イギリスは莫大な負債を抱えていた。戦争が植民地の防衛や拡大のためであったので、負債の一部は植民地人にも負担させるべきだとする見方がなされたのである。

イギリス政府は1764年に砂糖法(外国産糖蜜の関税を下げ、外国産の精白糖への関税を上げる)、

1765年に印紙法（新聞等の出版物、証書や書類等に印紙を貼る）、軍隊宿営法（アメリカ植民地に駐屯するイギリス軍に宿舎、食糧等を提供する）を成立させ、植民地からの税収増を導入したが、印紙法は広範な反対運動に遭い、半年で撤廃することになった。

1767年にイギリス議会はタウンゼンド諸法（イギリス製品か東インド会社の産品に課税する）を制定したが、イギリス製品不買運動が起こったばかりでなく、植民地間の連帯の機運が高まった。しかし、このとき、茶に対する税が残されたため、イギリスの茶は植民地の不満を大きくした。1773年の茶法によって、東インド会社の茶が植民地に安価で流入するようになると、商人は激怒し、1773年12月、入港した船の茶を投棄するというボストン茶会事件に発展した。当時の首相フレデリック・ノースは、国王ジョージ3世の強い意志を受けて、植民地に強硬な姿勢で臨んだのであった。

1774年に13植民地は、イギリスの政策への対策を協議するため大陸会議を開いたが、和解できなかった。1775年、イギリス軍と植民地人との間に小規模な戦闘が起こり、アメリカ独立戦争が勃発した。大陸会議は、ジョージ・ワシントン大陸軍総司令官に任命し、ワシントンはイギリス軍をボストンから退去させた。

1776年大陸会議はアメリカ独立宣言を採択した。1778年にはアメリカ軍の勇戦を見て、フランスはアメリカと同盟を結んだ。1781年、イギリスの敗色が明白となり、1783年にパリ講和条約が調印され、アメリカの独立は正式に承認された。

ドラマのあらすじは以下の通りである。

ある壮麗な王宮の外で、九人の子どもを連れた百姓女が、王宮の人に会わせて欲しいと下男に懇願している。この百姓女の夫は密猟したかどで拘留されており、釈放を願って請願書を持って来たのである。そこに一人の下女が手桶一杯の煮た糠を持ってやって来た。飢えた子ども達はそれを欲しがらる。この糠は猟犬の餌であるのに、母親はこれを子ども達に食べさせて欲しいと下女に乞う。子ども達は手桶に手を突っ込んで、糠を呑み込む。

場面は変わって、王宮の内部である。大広間のソファに侯爵、伯爵、神父、公爵夫人達が座って、談話をしている。彼等はイギリスを攻撃し、自由なアメリカを擁護している。人間が自由になれば支配者は利益を得ることができる。増大した国家の富は、支配者のために永遠の収益を保証することになる。自由は自分達上層階級の利益になる。即ち、自由は上層階級の享楽を無限に高め洗練する。しかし、この自由によって下層階級は上層階級の享楽のための資本を苦勞して調達し、それを許されることを喜ぶようにさえなるだろう。ある侯爵は、アメリカの商業が自由になれば、5つか6つの工場をこの国に建設しようと思っている。しかし、領地によって異なるのだが、近隣の貴族達は、工場労働によって自分より20倍も多く利益を彼等の使用人から得ているのだと、うらやむ。この時代、農業従事者から工場労働者に転ずるものが多く、彼等は賃金を得、裕福になった。自由は支配者階級に損害を与えさえしなければ、問題はない。そして、英国のことを傲慢な暴虐な国民であると非難する。その時、ある令嬢が中庭の騒動を聞き、一座の連中は窓の方へ押し寄せる。執事も下男も様子を見に行く。

場面は変わり、再び城の中庭である。糠を飲み込んだ四人の子ども達の二人は、しばらくして気絶して倒れ、他の子ども達は胃痛を訴える。母親は気絶した子どもの上に伏している。母親は執事に夫を帰してくれないと家族は路頭に迷うと訴え、死ぬなら、夫のいるところで死にたいという。しかし、罪人を釈放することは、国王でさえできないと執事は答える。そこへ、もう一人の下男が執事を呼びに来た。執事は令嬢が中庭の騒ぎに気づいたと知らされる。

再び城の内部の広間での談話。令嬢が中庭の騒ぎに動転したことで、令嬢は非難される。そんなことでは田舎の生活には向かないとか、都会と同様に不愉快なことが起こるのを完全に予防することは不可能であるとか、広間の窓は庭の花園に面するようにつけられるべきであるというような具合であ

る。しかし、花園が見えるようにすれば、中庭全体が見渡せなくなり、召使達の仕事ぶりが見えなくなるので不都合であるという結論になる。

そこへ執事が入ってきて、密猟の男の家族が牧師の請願書を持って来ているという。領主の判決が下されているのに、密猟の男は無罪であると牧師は主張していると説明する。そして、この牧師の話に移る。彼は妄想狂で、乞食が涙を浮かべると、すぐに信用してしまうとか、服従とか秩序ということを知らないとか、農民の出身で、人間は誰でも皆同じだと思っているとか、彼の十分の一税を牛飼いにまで分担させているというものである。また、密猟と嫌疑をかけられたのは、鹿がその男から百歩も離れていない所で死んでいたこと、その罪を償うためか、一束の薪が置かれていたことである。執事はこの家族が立ち去ったものとばかり思っていたらしいが、自分のいない間に不測の事態が起こり、下女が子ども達に手桶の糠を食べさせたのである。二人の子どもが気絶し、他の子ども達は胃痛で泣いていたが、もうよくなったと告げる。

糠を食べるとはひどいことだと公爵夫人はいう。下女の残虐行為の罰として、下女を二日間監獄へ入れるよう、また賤民を直ちに宮廷から追い出し、密猟した男が禁錮されている間、彼らのうちの誰も入れないようにと侯爵はいう。ここでカルタが始まる。次のことを喋り合いながら。

百姓は惨めな奴隷であり、家畜と同じである。そんな家畜のために請願書を作るとは間違い沙汰である。百姓には権利や自由は分からないし、お金もない。

令嬢は下男にお金を渡し、この金貨をその婦人に与えて、明日の八時に散歩道で、会いたがっていることを伝えて欲しいと告げたのである。

この時代、宮廷の浪費やアメリカ独立戦争に対する支援等でフランスは財政が逼迫しているにも関わらず、貴族達は長年世界のヘゲモニーであったオランダや、植民地課税でアメリカの移住者を苦しめたイギリスには敵対的である。著者自身がそのような思想を抱いていたのかもしれない。

また、ここには、貴族達の貧民への蔑みが行われているが、登場人物すべてが残忍な人間ではなく、下男も貴族の令嬢もまともな人間である。貴族の中にもこの令嬢のようにやさしい心根を持った人がいることは、心が救われる。

獵犬の餌である糠を貧民の子どもが食べたことで、公爵夫人が非常に驚いたということは、貴族階級は貧民の貧しさをこの時まで知らなかったと推測できる。また、中庭の花園に面するように広間の窓をつけると、召使達の仕事ぶりが見えなくなるというのも彼等を奴隷のように扱っている貴族の傲慢ぶりを表わしている。さらに、密猟した男の家族のために請願書を書いた牧師は、ペスタロッター自身であることが想像される。というのは妄想狂であるとか、乞食が涙を浮かべるとすぐに信用してしまうとか、人間は誰でも皆同じであると思っている等は、ペスタロッターが他の著作で記述していること、自己評価したりしていることであるからである。

ペスタロッターが乞食に限らず、人をすぐに信用してしまうということは、晩年の書『白鳥の歌』(Schwanengesang)の中で回想している。

「私は世の中の人はずべて、少なくとも私自身と同じように善良で、信頼できる人ばかりだと思っていた。だから当然私は青年時代から、私を翻弄しようとするあらゆる人の犠牲になった。私は誰かある人の悪意を自分の眼で見るまでは、あるいはその悪意から実際に被害を被るまでは、その人に悪意がある等と考えることは、私の性格としてできなかった。」<sup>4)</sup>

また、人間は皆平等であることについては、処女作『隠者の夕暮れ』(Die Abendstunde eines Einsiedlers)の中で次のようにいっている。

「玉座の上にあっても木の葉の屋根の蔭に住まっても同じである人間、その本質から見た人間、そも彼は何であるか。何故に賢者は人類の何者かを我々に語らぬのか。何故に気高い人達は人類の何者なるかを知らぬのか。農夫でさえ彼の牡牛を使役するからには牡牛の性質を知っているではないか。

牧人も彼の羊の性質を探求するではないか。」<sup>5)</sup>

子ども時代から、勇敢で、正直で、率直で、熱血漢であったペスタロッチーが、牧師として登場し、密猟した貧乏な男の家族を救おうと請願書を書いたことは、実にうなずけることである。

### 3 「田舎の靴屋」

この物語は、1782年10月31日 第44号として発行された。あらすじは以下の通りである。

主人公は、貧しい田舎の靴屋であるが、秩序正しい勤勉な生活を送っている。靴屋がこつこつと働きながら、年を経るにつれて、家の内外を修繕・改造したり、職人を増やしたりして、商売を繁盛させ、家庭生活をより充実させる物語である。

靴屋の屋根の上の煙突に長靴の絵が描かれている。この絵は彼にとって生涯の目的でもあり、栄光でもある。彼は靴屋という職業に誇りを持って生きており、村人のために靴を修繕したり、いい靴を作ったりしようと希望に満ち満ちている。

十五年前には、小さな古びた小屋で、屋根も満足できるものではなかった。多くの窓には窓ガラスがなく、家の戸は腐っており、蝶番からはずれている窓の錠戸が街路に落ちないように、縄で結びつけてあったし、腐った戸や錠戸の穴には木片が差し込んであった。しかし、庭の菜園には立派な野菜があり、苗床もよく耕されていた。ある日、開けっ放しの窓から主人が仕事をしているのを見ることができた。彼は仕事台のところに坐り、シャツの袖を肘の上までまくりあげ、靴を熱心に縫っていた。その様子は遅しいとともに、実に楽しそうであった。この仕事が彼の天職であるかのように、朗らかに歌を唄ったり、口笛を吹いたりして、仕事に打ち込んでいた。仕事台の上には、靴の底革の小さなものや、革の切れ端のようなものがきちんと並べられており、暖炉のそばに多くの古靴が置かれており、また一、二足の新しい靴が炉棚の上の祈祷書と聖書との脇に置かれていた。床は清潔でさっぱりしており、僅かな革の屑も散らかさずに、適当な場所に置かれていた。しばらくして、彼の妻らしい人が食事を持って入ってきた。服装は粗末だが、健康で清潔な感じである。彼女は夫に食事を勧め、夫は修理中の靴を脇へ置いて立ち上がり、テーブルの一方に坐った。

著者は以上の観察から、靴屋は貧乏人であるが、きちんとしており、けなすところはないという感想を抱いたのである。

その後一年経つと、部屋に一つの新しい錠戸と新しい窓とができた。そして、さらに一年後、玄関の戸、庭垣、庭にも新しいものができた。窓の下には花瓶が置かれ、家の周囲には葡萄の木が植えられ、葡萄の葉が装飾になるように施されていた。

それから大分たって、部屋は新しくはなっていたが、古いものもあった。同じ場所に聖書と祈祷書があり、同じ場所に靴や靴の製作道具や材料があったが、それらは十倍も多くなっていた。革の貯えは隣室に積み上げられていた。今では、三人の職人が主人と一緒に嬉々として仕事をしていた。種々様々な新しい靴が並べてあった。台所用品や食器等もびかびかに磨かれて炉棚に置かれていた。部屋の中央には天使のように美しい子どもが子猫と戯れていた。以前より落ち着いた明るい感じの母親もそばにいたが、服装は地味で、家事や島仕事の装いをしていた。主人は、四年前と全く変わらなかった。

十年経って、著者は村はずれで彼と息子に会った。彼は干し草を積んだ荷車と三頭の牝牛を牧場の方へ駆っていくところであった。著者は靴屋が百姓になったのではないか、あるいは副業として農業にも従事したのではないかと心配する。しかし、牝牛がつけている革の部分は靴屋のものであることを知り、この男が靴屋のままであることを知って安堵する。

著者は彼が住んでいる小屋を見下ろせる小山へやって来た。そこにはいかにも幸せな家族の姿があった。子ども達の歓声と仕事中の雇い人の歌声と、飼っている山羊の鳴き声とが調和を保っていた。家の周囲を回って見たものは、家庭的な悦楽と家政的な心づかいであり、仕事のための便利さと休息

のための気楽さが結合していた。

著者は部屋の中に入ってみたいくなり、靴の具合が悪いとあって、中に入れてもらった。靴は二、三針縫っただけで、修理というまでには至らなかった。部屋の中は、十年前と全然変わっていなかった。

こんな新しい家だから、部屋も新しいだろうと思ったとの著者の質問への答えは「この古い部屋が、私達に新しい家を建ててくれたのです。だからそれはそのままにして残してあるのです。夫も私も古いものを捨てる者は新しいものを得ることはできない、と堅く信じております。」<sup>6)</sup>また、靴の修理代を尋ねたら、「旅行する歩行者には、勘定はしないことにしています。でもぜひともとおっしゃるのでしたら、半クロイツェルです。」<sup>7)</sup>と答えたのである。

勤勉な靴屋の主人は、質素な生活を送り、少しずつ家を修繕したり、雇い人を雇ったりして、生活が豊かになった。子ども達も、健康に明るく育っている。経済的に多少余裕ができて、無駄なことにはお金を使わず、古い物を捨てないで、残している。また、単なる営利主義者ではなく、旅行者には、靴の修理代を取らない律儀なところもある。

靴屋が干し草を積んだ荷車を三頭の牝牛に引かせていたのを見た時、著者は靴屋が百姓になったのではないか、あるいは兼業として農業にも従事したのかと思愕然とする。著者ペスタロッチャーは、靴屋が自分の仕事に誇りを持ち、堅実に生活しているのを実に頼もしく思っていたのである。それに、ペスタロッチャー自身がノイホーフで農業に従事し、失敗した経験があったので、靴屋に百姓にはなってい欲しくなかったのである。著者は幸いにして、靴屋が靴屋のままだったことに、大きな喜びを感じたのである。靴屋はこつこつ働き、富を蓄え、余裕ができ、乳を搾るために牝牛を求めたのである。旅行者には修理代を取らない方針も筆者の心を打つが、それに甘んじるのではなく、自分の感謝の気持ちを示そうと幾らかを払った著者の温かい心、そしてどうしてもとってほしいということなら半クロイツェルと答えた靴屋の夫人の聡明さが感動的である。半クロイツェルは当時のお金でどの位か定かではないが、現在の日本円にして100～200円位であろうか。著者は、靴屋が貧しい生活の中で、計画性をもって小さな家を大きな家にするのができた真摯な生活態度を誇らしく思い、畏敬の念さえ抱いたのである。

#### 4 「キュニグンデ」

「キュニグンデ」は、1782年3月7日（10号）より、4月4日（14号）までの5回に亘って、タイトルも作者名もなしに連載された。以下にこのドラマのあらすじを述べよう。

「キュニグンデ」は、町の伯爵家に奉公している純真な田舎の娘キュニグンデが、窃盗の罪を犯すまでの過程をリアルに描写したものである。

キュニグンデは、心のやさしい娘である。一年分の給金を貰ったなら、病気の母親に届けようと、美味しいものも食べず、新しい着物も買わずに、一心に働いている。その身なりは、他の奉公娘の誰よりも慎ましい。キュニグンデは心の正しい娘である。言動に陰日向なく、嘘を言った試しはない。どんな小さい物でも拾って自分の物にするようなことはしない。

キュニグンデのこのような生き方を、同じ伯爵家の従僕であるラッコリーは軽蔑する。ラッコリーは、見つけたものは、自分の物にしてしまう狡猾な人間である。キュニグンデに向かい、もっと勇敢になりなさい、頭を働かせなさい、今に正直が報いられないことが分かるだろうよ、と嘲笑う。

場面は変わり、とある居酒屋。キュニグンデの給金を母親の所へ届けるよう依頼されたボルザックが杯を重ねている。飲むほどに、彼は彼女から給金を預かったことを得意になって話し始める。一人の男がそれを聞くや、いそいそと立ち去る。男は彼女の母親が、床屋と粉屋から借金していることを知っていたのである。人食いという渾名のこの男、グルローがチャンスを逃がす訳がない。まず、床

屋に駆けつけ、債権を買い取り、債権譲渡の書きつけを手に入れる。次に、グルローは粉屋に現れ、言葉巧みに賭博に誘い、欺いて債権を手に入れてしまう。そして人食いグルローは、意気揚々として役所に現れ、キュニグンデの母親の差し押さえ状を作ってもらう。

一方、ボルザックは、彼女の母親に手紙と給金を手渡した。母親は、娘が古い靴をはき、粗末な着物を着て、昔の通り、快活で、美しく、正直で、信心深いことを知って喜ぶ。そこへグルローが床屋と一緒にやって来る。そして、彼らは母親が実際に借金した額を遥かに超えた給金を全部差し押さえる。母親はショックで倒れてしまう。

キュニグンデの心は動揺している。ラッコリーの言うことが正しく、自分の正直が愚かなのかもしれないという考えに悩まされている。そこへ、ボルザックが帰り、事件を知らせる。彼女は仰天する。母親の為に町へ出、母親の為にどんなに辛い奉公に耐えてきたか。母親を助ける為に、着る物も着ず、食べる物も食べずにお金を貯めたのだ。それなのに、人食いは彼女の汗と血とを吸ってしまい、母親はその為に病の床にある。これが自分の正直の報いであろうか！

キュニグンデは、悲しみの余り、伯爵家の仕事も手につかず、ぼんやりしている。伯爵夫人はそのことに気づき、尋ねる。彼女の口から、母親が病気だと聞かされた夫人は、孝行娘のキュニグンデに優しい言葉をかけることもなく、冷淡に告げる。「老人は死ぬに決まっています。死ぬ前には病気になります。あわれな老人が苦しみから離れる時には、神に感謝しなければいけません。しかし私に関係があるのは、あなたが自分の奉公のことをよく理解しているかどうかということです。笑うにせよ、泣くにせよ、その為に何事にも手拔かりがないようにして貰いましょう。」<sup>8)</sup> 女主人は、明日は市があって、沢山の客が見えるので、もっといい着物を用意するように告げて、立ち去る。

彼女はラッコリーが正しかったと思う。主人夫妻の豪華な生活や、邸内のあらゆる忌まわしい光景とが、動転した少女の脳裡を駆けめぐる。そして、ラッコリーに事情を話し、着物を買うためにお金を借りる。彼は得意げに教える。人間、獅子や虎と同じことで、食わねば食われるのだと。

キュニグンデの胸は苦しく、頭は乱れてくる。自分の全境遇と全ての出来事が、みるみる耐え難い、不当なことであるように思われ始めた。

「即ち、彼女は神を忘れたのである。神なしには人は苦しみの中で必ず野蛮になる。(中略) 徳は澄んだ心情の中にのみ宿る。もし徳が悲惨の中にも宿るとすれば、それは人を保護する信仰の生きた感情によって、二倍にも三倍にも強められていなければならない。」<sup>9)</sup>

これまで虚栄心に襲われたことなど一度もなかった彼女が、今や華美な着物を買うために胸をわくわくさせて、お金のある限り目につくものを片端から買い集めた。

伯爵家は、市に来た田舎の貴族達でごったがえした。美しく着飾ったキュニグンデを、皆が賞賛し、貴人の一人一人から心付けをもらった。これまでになかったことである。

市の終わった翌朝、キュニグンデは美しい一つの指輪を塵だめの中に発見した。そして、このことを伯爵夫人に言うべきか、言うまいかと迷いに迷う。とうとう、ラッコリーに相談を持ちかける。その指輪がどの位値打ちのあるものなのか、聞いてみて欲しいと。

ラッコリーは、金細工師の所へ行き、その指輪が高価なものであることを知って驚く。彼は夫人の部屋で、故意に植木鉢を突き倒し、夫人を激怒させ、即日解雇される。彼は次の働き口のために品行方正で、高貴な人の奉公に最適であるという推薦状と給金を貰い、旅立つ。キュニグンデには、指輪の代わりに僅かばかりのお金を与えて。

グロースグヴェール家の人々は、市から帰宅して三日目に、指輪を紛失したことに気づく。領主は伯爵に手紙を書き、馬丁に至急届けさせる。キュニグンデは、領主の召使がやって来たのを見て、死人のように青ざめ、気を失う。

伯爵夫人 「女泥棒！すぐ指輪を・・・」

キュニグンデ 「私は、もうそれを持っていません」

伯爵夫人 「ではどこにあるのですか。誰がそれを持っているのですか」  
キュニグンデ 「ラッコリーが持っています」  
伯爵夫人 「でもラッコリーはどこにいますか？」  
キュニグンデ 「ああ！彼は行ってしまいました」  
伯爵夫人 「あなたが話せば、許してあげます。でも指輪を取り返さなければ、あんたは首です」  
キュニグンデ 「たとえ私は殺されても・・・」  
伯爵夫人 「もうよろしい！15分以内に話さなければ、もう容赦しません。あんたは今日のうちに、きっとほかの人の所で告白しなければならなくなるでしょう」<sup>10)</sup>

田舎の豊かな自然の中で育ったキュニグンデは、ラッコリーの饒舌に対抗し得る高い知性も、何物にも動じない神への強い信仰心も持っていなかった。もし彼女がそれらのどちらかを持っていたならば、たとえ彼の奸知が一時的にでも彼女を混乱させようと、惑わせようと、結局は、彼の誘惑を一蹴し得たであろう。

ペスタロッチャーは、次のように注釈を加えている。

「キュニグンデは、もし彼女の心情 (Herz) だけが誘惑されたのなら、あらゆる試練のうちに、高貴に純粹に気高く進んだであろう。しかし、ラッコリーは、彼女の頭 (Kopf) と争ったのであり、したがって、彼女は一撃のもとに打ちのめされたのである。」<sup>11)</sup>

「人生の真の幸福についての高尚な教訓『人間は、自分自身の為に正しく行為すべきものであって、他人の為に正しく行為すべきではない』」<sup>12)</sup>

この教訓をキュニグンデは、知っていたであろうが、実行に移すほど聡明ではなく、実行するには若過ぎた。また、ペスタロッチャーは、罪に落ちたキュニグンデの行く末については述べていないが、次のことを念頭に置いていただろう。

「悪の源泉を防止しようとする立法家は、不徳の一般的な源泉 (中略) 傲慢、家庭的な高慢、貪欲、怠惰、贅沢、そして特にエゴイズムを阻止しなければならない (後略)」<sup>13)</sup> さらに、「立法家は、犯罪者の心の中に燃えている善の最後の余燼が、彼の罪の処罰方法によって、かき消されぬように配慮しなければならない。」<sup>14)</sup>

キュニグンデは自ら罪を犯したのではなく、ラッコリーに教唆されたのである。したがって、キュニグンデを一方的に処罰するのではなく、情状酌量の余地があること、また、キュニグンデの心根の優しさ、真面目さを評価し、さらに聡明さを身につけさせることをペスタロッチャーは念じていたであろう。

このドラマは、執筆してから164年経って、即ち、1946年 (ペスタロッチャー生誕200周年) バーゼルの市立劇場で上演されたのである。また、「キュニグンデ」は1980年3月15日午前10時からと3月21日午後8時5分から、スイスでラジオ放送 (DRS 2) <sup>15)</sup>されたのである。

『Tele』誌<sup>16)</sup>はブルグドルフ城のペスタロッチャー記念碑の写真を載せ、「十八世紀のラジオ小説」(Funkersaehlung aus dem 18. Jahrhundert) という見出しで、この頃活躍したペスタロッチャー及びこの作品について解説している。『Tele』誌によると、「キュニグンデの運命は、ブレヒト (B. Brecht 1898-1956) の『ゼチュアンの善人』(Der gute Mensch von Sezuan) のシェン・テ (Shen Te) を想起させる。そして、このドラマの主人公である善人のシェン・テは、善を行うことと、生きていくことが正面衝突するような境遇に追い込まれていく」と述べている。

この二つの作品の共通点は、キュニグンデもシェン・テも善人であるということである。しかし、生きていくためには、単に善人であるばかりでなく、聡明な知恵が必要になる。シェン・テは、従兄弟の聡明さによって救われるが、キュニグンデは救われない。

## 5 「教育と政治についての所見」

この論説は、第37号1782年9月12日に発表されたものである。原文にはタイトルはないが翻訳書には上記のタイトルが載っている。またその後、「第37号の原則や意見の説明のために」と題して、第39号1782年9月26日に補足を発表している。

ここでいわれていることは、家庭教育ということである。もっと詳細に言えば、この時代の教育批判、親の務め、父親が子ども達に家業や家事を手伝わせること、自然主義の教育である。以下に、この論説における教育論を順に述べてみる。

### 当時の教育批判

当時は人間を一面的に捉え、知的な面のみを重視した啓蒙教育が支配していた。即ち、不自然な技巧的な教育であり、生活に何の役にも立たないことをむやみに暗記させるような教育がなされていた。こうした教育に対して、ペスタロッチーは次のように批判している。

「家庭で育成されるべき筈の知恵が育成されないこと、健全な悟性が育たないこと、美しい心情が育成されないこと、静かな幸福が存在しないこと、落ち着いた静けさが存在しないこと、礼節と境遇との間に調和が存在しないこと、諸々の能力と願望の間の調和がとれていないこと（中略）これこそが我々の時代の啓蒙の本質的特徴である。（後略）」<sup>17)</sup>

### 為政者がすべきこと

「設備を整備したり、家庭教師や学校の教師を養成することではなくて、国民や農民を立派な人間に、理解ある父親に、幸福な祝福された市民にするすべての事業を開始し、維持すること—これこそ君主が国の子ども達の真によき教育を期待することの基礎である。」<sup>18)</sup>

### 親の務め

冒頭に「生きること—自己の地位において幸福であること、そして自己の境遇において役立つものになること、これが人間の使命であり、子どもの教育の目標である。」<sup>19)</sup>と述べている。これは自分の生まれた境遇、自分の育った境遇において、つまり親の職業と無関係ではなく、家庭の事情によって、また子どもの能力や興味に応じて教育されるということである。そこで、子どもを教育するのは両親の務めであり、両親の叡智と徳性が肝要である。

### 労作の大切さ

祖先の教育の秘訣は、すべての境遇において、常にできるだけ早くから子ども達に家事の手伝いをさせようとしたことにあった。

ペスタロッチーは父親についての3人の言を揚げている。3人がまだ子どもだった頃、それぞれの父親は家業や家事を手伝わせたこと、それは実につらいものではあったが、子どもは成人してから回想し、それが貴重な体験であったことをいっている。以下に紹介する。

ある人は、「私が幸福であり、私の家が幸福であるのは、私の父親が私を酷使してくれたお陰である。（中略）父親は色々様々な事柄を、私の家において為し且つ取り扱うことを私に強要した」と。また、ある人は「私の父親は私に残した全てのものをまるで私が自ら獲得しなければならないかのように私に教育した。」また、ある人は「私はまるでこの世では私の頭も心臓も全五官も、私の職業と事業との中にひきこまれた。そして今や私は、私がこの世において、また私の仕事場の外において成り得たすべてを、私の少年時代をその中で着実に根気よく過ごさねばならなかった環境に負っている

ことを完全に理解した」と。<sup>20)</sup>

なぜ家庭における労作が大切であるかという点、子どもの諸々の能力が家庭での労作によって発展するからである。即ち、身体を使うこと、知能を使うこと、技術を磨くこと、他への思いやりを持つこと、また、親子等とのコミュニケーションをはかることによってである。習慣になった労作は、諸能力を継続的に発展させ、人格形成になり、また、それは将来の職業選択にも連結する。

ペスタロッチーに言わせると、「こうした練習の欠如は、子どもにとって他のどんな種類の知識によっても補うことができないものであると信ずる」<sup>21)</sup>という程である。

### 自然主義について

子どもの発達の可能性を無視してはいけぬ。何もしなくても、時期が来れば自然に才能の芽が出、茎や葉が出、花が咲くであろう。

「自然は人間の高等な素質を殻で包むように保護しているのものであって、その殻が自然に開くのを待たずにこれを毀すなら、あなたはまだ成熟しない真珠をむき出しにすることになり、あなたが子どもから得るべきはずの生活の宝を破壊してしまうことになる。」<sup>22)</sup>

即ち、ルソーやフレーベルと同じことを主張しているのであるが、子どもに多くのことを要求してはいけぬ。子どもの持っている能力以上のものを、また、大人と同じようなことを期待してはいけぬ。

「人間は子どもの時、子どもとしてありうる最上のものでなければならぬが、しかし、ありうる以上のものであってはならない。そうでないと、その境遇において、その地位において立派な大人にはなれなくなってしまう。」<sup>23)</sup>

### 母親との間に生まれる愛と感謝の念は労働に導く

『ゲルトルート子ども教育法』(Wie Gertrud ihre Kinder lehrt)で、いみじくも述べているように、子どもの欲求を母親が満たすことによって、子どもの中に母親への愛情や信頼、感謝の気持ちが生まれ、それはやがて他者への愛情や信頼、感謝の念に発展し、国家への愛着、神への信仰に繋がっていく。それは「パンを得るための特別の活動、即ち人間の道徳性や徳性を地上にしっかりと打ち立てる労働にまで導く」<sup>24)</sup>のである。

そして、人間と動物との違いは、人間は「生計の道を見出す」<sup>25)</sup>ことにあり、ここに労働が大きな位置を占めるのである。

この論説で繰り返し主張されていることは、人類の唯一の教育者は父親と母親であること、そして家庭における労作である。この労作は他のどんな知識によっても補うことができないともいっている。啓蒙時代においては、家庭の労作は卑俗な事柄と見られていた。そんな時代だから、ペスタロッチーのこの主張は顧みられなかったであろう。そして、母親との間に生まれた愛情と信頼、感謝の念がやがて労働への意欲として駆り立てられるのである。現在、生活が電化され、我々の生活は便利になったが、そのために我々は自分の手足を使わなくなったばかりか、環境を破壊している。今こそ労作の意味を考えてみる必要があるであろう。

## 6 おわりに

ペスタロッチーのイヴェルドンの学園の生徒として九年間学んだドウ・ガン (Roger de Guimps, 1812-1894) は、こういっている。「『スイス週報』の大部分を占めるのは教育である。一般にペスタロッチーはそこでは自己をルソーの弟子であるとしている。しかしペスタロッチーの民衆的にして実

実践的な精神、道徳と宗教の発達を重視したことによって、彼はジュネーヴの哲学者（ルソー）から極めて遠く相距っているのである。」<sup>26)</sup> また、『スイス週報』続を「ペスタロッチーの天才の最も注目すべき所産の一つである。彼の思想の豊かさ・独創性・独立性がここには自由に、また外からの影響を受けずに発揮されている。」<sup>27)</sup>と賞讃している。

さらに、ジルバー（K. Silber, 1902-1979）は、次のようにいっている。「『フランスの奥地の場面』や『キュニグンデ』のように、『スイス週報』には民衆の不幸と貴族の高慢との対比を鮮やかに描写する興味深い作品が含まれている。その自然主義的な文体と革命的な調子とは、疾風怒涛の人々の社会的な戯曲に驚くほど類似している。」<sup>28)</sup>

ここでは、四つの作品を扱ったけれども、この『スイス週報』の論説等はヨーロッパの諸国にも少なからず影響を与えたという。即ち、ペスタロッチーの提言していることを参考に諸制度の改革を行なうため、また社会的環境の改善のため、国々の担当者を派遣させ、ペスタロッチーに教えを受けたという。

ここに揚げた四つの作品は、ドラマが二つ、物語が一つ、論説が一つで、比較のしようがないが、筆者が最も感動したのは、田舎の靴屋である。この物語は、最初から最後まで心静かに読むことができた。真面目に、ただひたすらいい靴を作ることに専念し、家族を愛し、大切にし、小さな小屋を大きな家にした靴屋の生き方に、胸を打つものがあった。しかし、二つのドラマは貴族の驕りが感じられ、胸を締めつけられる思いであった。「フランスの奥地の場面」は最後の場面が感動的であるが、「キュニグンデ」は最初から胸が高鳴るような思いで、最後はキュニグンデへの憐憫の情に駆られた。最後どうなるのか読者の想像に任されるとしても、いい結末ではない。例えば、警察に連行されて事情を話したとしても、直ちに釈放されるわけではなく、もはや奉公の仕事に就く可能性もあろうはずがない。ペスタロッチーはここでも貴族の貧乏人への傲慢さを訴えたかっただろうが、そればかりでなく、若い娘が聡明でなければいけないことを強調したかっただろうか。

「教育と政治についての所見」では、父親の力というものを感ずる。この作品では、父親の家業、例えば農業とか商業、手仕事を含めた広い意味での家事を指していると考えられるが、子どもの頃から、家事の手伝いをさせることは、現在の家庭にもいえることであるし、母親からより、父親から子どもに手伝いをするようにいうことは、父親の力を発揮するばかりでなく、父子のコミュニケーションにもつながることではないだろうか。

『スイス週報』は、18世紀末の作品ではあるが、その教育論は現在の家庭教育の活性化を図るために参考になると考えるのである。

## 【注】

- 1) I. Iselin (1728~1782) バーゼル生まれ、ドイツのゲッティンゲン大学で法律学を修める。卒業後、帰国してバーゼルの書記官になる。単なる政治家に満足せず、教育改革にも尽力する。『スイス週報』ばかりでなく、それ以前の『隠者の夕暮』『リーンハルトとゲルトルート』の出版も彼の援助によるものであった。彼の死（7月15日）をしのび、ペスタロッチーは『スイス週報』第30号（1782.7.25）に追悼文を掲載している。「高貴な人」「わが父」「わが友」「わが恩人」「わが愛する人」と呼びかけ、いかに精神的にも経済的にもペスタロッチーを支援したかを述べている。また、第32号（1782.8.8）、第33号（1782.8.15）、第34号（1782.8.22）でも、イゼリンの人柄や偉業を称えている。  
J. H. Pestalozzi: Ein Schweizer-Blatt, Pestalozzi Saemtliche Werke herausgegeben von A. Buchenau, E. Spranger, H. Stettbacher, Berlin und Leipzig 1927 8. Band, S. 221~228, 235~251  
ペスタロッチー著：佐藤 守訳『スイス週報』続、長田 新編「ペスタロッチー全集」第5巻、平凡社、1959年 319~348ページ
- 2) J. H. Pestalozzi: Ein Schweizer-Blatt, S. 5
- 3) ebenda, S. 242f.
- 4) J. H. Pestalozzi : Pestalozzis Schwanengesang, PSW1976 28. Band, S. 217
- 5) J. H. Pestalozzi : Die Abendstunde eines Einsiedlers, PSW 1927 1. Band, S. 265

- 6) J. H. Pestalozzi : Ein Schweizer-Blatt, S. 327
- 7) ebenda, S. 328
- 8) ebenda, S. 88
- 9) ebenda, S. 91
- 10) ebenda, S. 105
- 11) ebenda, S. 84
- 12) ebenda, S. 85
- 13) J. H. Pestalozzi : Ueber Gesetzgebung und Kindermord, PSW 1930 9. Band, S. 111
- 14) ebenda, S. 104
- 15) DRS は Deutsche Raetoromanische Schweiz  
スイスのドイツ語圏とレトロマン語圏のための放送。ドイツ語、レトロマン語の放送を流す。
- 16) Tv Radio Zeitung 17. Maerz - 23. Maerz 1980  
一週間のラジオ・テレビの番組を紹介している週刊誌
- 17) J. H. Pestalozzi : Des Schweizerblats Zweytes Baendchen, S. 293f.
- 18) ebenda, S. 277
- 19) ebenda, S. 269
- 20) ebenda, S. 274f.
- 21) ebenda, S. 289
- 22) ebenda, S. 286
- 23) ebenda, S. 273
- 24) ebenda, S. 284
- 25) ebenda, S. 286
- 26) ドゥ・ガン著 新堀通也訳『ペスタロッヂ伝』—その思想と事業 学芸図書 1975年 修正7版111ページ
- 27) 同書 115ページ
- 28) K. Silber : Pestalozzi Der Mensch und sein Werk, Heidelberg 1957 S. 111

#### 参考文献

- 1 長田 新編『ペスタロッヂ全集』第4巻、第5巻 平凡社 1959年
- 2 ケーテ・ジルバー著・前原寿訳『ペスタロッヂ』岩波書店 1981年
- 3 福井憲彦『フランス史』山川出版社 2005年
- 4 川北 稔 編『イギリス史』山川出版社 2003年
- 5 紀平英作編『アメリカ史』山川出版社 2007年
- 6 五十嵐武士・福井憲彦『アメリカとフランスの革命』中央公論社 1998年
- 7 長坂寿久『オランダを知るための60章』明石書店 2007年
- 8 千田是也編集『プレヒト戯曲選集』第3巻 白水社 1978年
- 9 福田博子『劇作家ペスタロッヂ』日本女子経済短期大学研究論集 39号 1980年
- 10 福田博子『人間ペスタロッヂについての一考察』秋草学園短期大学紀要 第13号 1996年

(受理日：2008年1月31日)